

月刊

書字文化

平成 28 年

12 月号

毎月 10 日発行

一般社団法人日本書字文化協会（代表理事・会長 大平恵理）

〒164-0001 東京都中野区中野 2-13-26 第一岡ビル 3 階

電話 03-6304-8212 FAX 03-6304-8213

ホームページ <http://www.syobunkyo.org>

第 5 回全国書写書道伝統文化大会

書文協ホームページの機能が一部故障中でご迷惑をかけます。同大会のご案内は、同ホームページ最上部のブログへのリンクから入って書文協外史 12 月 1 日付の第 5 回伝統文化大会案内（課題一覧含む）をご覧ください。お問い合わせは上記電話、FAX、ホームページの問い合わせホームからお寄せ下さい。

<伝統文化大会当面のスケジュール>

◆平成 28 年度全国年賀はがきコンクール◆平成 28 年度学生書き初め展覧会

応募締め切り 平成 29 年 1 月 20 日（金）必着

結果発表 2 月 6 日（月）連絡開始

優秀者学校伝達 2 月末までに

表彰式 3 月 5 日（日）中央区立産業会館（東京・東日本橋）

優秀作品展示会、席書披露会を同時に行います。

賞状・賞品送付 3 月 6 日（月）から発送開始

年末・年始

12 月 30 日（金）から 1 月 3 日（火）まで休業です。お急ぎの方は下記にご連絡ください。いずれも書文協専務理事、谷口のモバイルです。

携帯電話番号 090-1252-6137

メール t.taizou8212@ezweb.ne.jp

訃報



書文協顧問、全日本書写書道教育研究会（全書研）会長、井上孤城（こじょう、本名・輝夫＝てるお）先生が平成28年11月29日、死去されました。大平会長に直に伝えてこられた和子夫人によると、家族の一人の誕生会の席で誤飲し、呼吸困難で亡くなりました。昭和5年10月31日生まれ、享年86歳。愛する人達がそろった場での往生に、孤城先生も満足であったろうと拝察いたします。合掌。

12月7日、親族だけの密葬が行われ、年明けに偲ぶ会が開かれる予定です。

評伝 井上孤城

硬骨の古武士を思わせた。「私」を捨て「義」に生きる、どこか潔い、孤高の雰囲気は、青年時代の波乱の人生から生れた。価値観が大転換した戦後の混乱の中で歩き通した書写書道教育の道は、老いて「髭の仙人」と呼ばれる実像として結実した。

「熱き血潮の予科練の…」。先の大戦末期のヒーローだった予科練（海軍飛行予科練習生）に入隊する2週間前に敗戦となった。すでにグライダーの操縦練習もしていた井上少年はゼロ戦の操縦にもあこがれていたが、皇国の少年として敵艦に体当たりしてでも、立派に死ぬことを考えていた。「なのに死に損ねた」。その痛恨は井上の人生を貫く思いとなった。

アスリートを目指すつもりだった。しかし、実家近くの小金井市の玉川上水沿いをランニングしているとき、進駐軍のジープがはねたビール瓶が頭に当たり、運動機能に障害が出た。それでも東京学芸大学時代は陸上に打ち込んでいた。黙々とトラックを走る姿を大学同期の蓮池守一（書文協中央審査委員会顧問）は、今も鮮明に覚えている。蓮池もまた、エリート軍人養成校の陸軍幼年学校への進学を控えながら、舞台が突然変わった一人だった。後年二人は、井上は全日本中学校長会、蓮池は全国連合小学校長会の会長として公教育の現場に力を注ぐことになる。

敗戦の混乱の中で井上少年が決めた進路は教職だった。後年、井上は「学習指導要領を作るのは（国でなく）学校だ」とリベラルな発言をしている。軍国主義に染められた戦前の教育には批判的だった。

その井上が同大学の専攻科として選んだのが書道だった。当時、書道は軍国主義をけん引した精神的存在とされていた。この誤った書道観により書道は初等中等の学校教育からページされた。加藤東陽（書文協中央審査委員会委員長、全書研会長代行）によると、このページは日本側からGHQ（占領軍総司令部）に申し出たことが分かっている。

評伝・井上孤城 2

日陰の身となった書道を井上を選んだのは、書がもともと好きだったこともあるが、置かれた環境を自分の身に重ねた思いからであった。井上は書き続けた。あまりに長く筆を握り過ぎて手が開かず、左手で右手の指をこじあげたこともしばしばだった。

雅号の孤城は、唐の政治家であり書家であった顔真卿（がんしんけい）の「祭姪文稿（さいてつぶんこう）」から引いた。祭姪文稿は中国屈指の書と言われ、全文 268 文字。安祿山の乱で死んだ甥に対する顔真卿の祭文の草稿だが、その中に「賊臣救わず、孤城は包囲され、父は陥落し、子は死に、巢は傾き、卵は覆った」とある。不正義な時流に包囲された気分の中で筆を握り続ける自分を、孤城に重ね合わせたのだった。

小平市の中学校を振り出しに教職人生を始めるが、その優秀さから都教委の指導主事として長く教育行政にも携わった。全日中の会長と同時に中体連（中学校体育連盟）の初代会長も務めるなど、その人柄は人望を集めた。

師は続木湖山、氷田光風。共に書写教育の権威であった。井上は日本武道館席書の審査委員長を交代で務める中で、中学 1 年で文部大臣賞を受賞した

大平恵理に注目していた。大平もまた、練習に通う小金井の氷田が井上宅のすぐ近くに住んでいたこともあって、井上を子供のころからよく知っていた。

井上は氷田の厳しい指導を受けていた。相弟子の辻真智子（書文協中央審査委員会副委員長）によると、弟子の中で最後まで氷田に尽くしたのが井上だった。しかし、筆の角度で注意を受けても、自分で納得できない限り変えなかった。その思い出を辻は「井上先生と私で共同戦線を張りましてね」と語り、当時を思い出し微笑んだ。

弟子の私物化を嫌った。師弟の立場は厳然とあっても、公共的であることを重んじた。弟子の私物化は往々にして書道界の悪弊として指摘されるが、公教育に生きた井上にとって、それはなんとしても避けるべきことだった。



評伝・井上孤城 3

後年、大平が書文協を立ちあげると、井上はその大義を認め、全力でこれを支援した。井上の人脈を総動員して構成した書文協中央審査委員会は当代屈指の書写書道教育の権威者を集めた。「社会教育団体として学校教育を下支えし、生涯教育の受け皿となる」という書文協の理念は井上によって導かれた。

日本書字文化協会の書字文化は井上の提案による。書写にない文化的観点を含めた高次の概念として、草創期の学習指導要領の文中から引いた。書文協顧問、公益社団法人日本弘道会会長、鈴木勲（元文部省初等中等教育局長、元文化庁長官）は「書字文化はこれから大事なすばらしい言葉だ。ぜひとも定着させてほしい」と絶賛した。以来、井上が会長、長野秀章（書文協中央審査委員、東京書芸学園長）が理事長を務める全書研の年次総会のスローガンは「書字文化を育む～」が定番となった。



井上の書風は、和歌にたとえれば飾り気のない万葉集の世界と言えるのではないかと。勢いのある筆遣いから実直さがにじみ出ている。文言も万葉集から引いたものがある。特に「孤悲」はその代表だろう（写真）。万葉仮名も読みの当て字だけでなく、意味から充てられた文字も多いと言われ、孤悲はその一例である。万葉の人々の恋愛観がほのぼのとその2文字から浮かび上がる。井上の作品は漢字の持つ魂（言霊）をよく表している。

後年、特に外国から日本アートの書き手として、またその教育家として注目されるようになった。世界の美術拠点を目指すタイ国立シラバコーン大学から客員教授に委嘱されたのはその好例である。

井上が支援する書文協の書写書道大会は、文字・活字文化推進機構が共催するところとなった。推進機構は平成17年、超党派で議員立法された文字・活字文化振興法に基づいて創設された公益財団法人で、

文字文化の継承発展を目指す書文協の公益性を高く評価したのだった。

書文協に惜しまぬ応援を続けた井上は、書文協の公式の場に最後に現れたのは平成27年9月26日の全国書写書道総合大会審査会だった。中野ゼロホールの一室でボードに貼られた作品を解説中、足をもつれさせてよろけ、周囲をハッとさせた。転瞬、そばにつきっきりで注意していた書文協スタッフが支え、事なきを得た。心臓疾患の悪化が心配されていた。以後も大平は折に触れて報告を続けたが「書写書道教育に生きた井上個人史の上梓を書文協も手伝う」という約束は、まだ果たされていない。（文中、敬称略。文責・谷口泰三）